

里芋祭り

茂名を代表する祭礼が、国の重要無形民俗文化財にも指定されている「里芋祭り」です。

茂名の鎮守である十二所神社の祭りに合わせて、毎年二月十九日から二十一日の三日間を通して一連の行事が行われます。

現在は二十日に行われる、茂名の特産であるモナイモ(茂名芋)と呼ばれるアカメ芋(里芋の一種)を使った作り物の奉納の儀が主眼となつていますが、その前日十九日の準備から二十一日の片付け作業まで、多くのしきたりや伝統を受け継いでいます。

奉納する一对の作り物は当番と積み番仲間と呼ばれる集落の代表によって十九日に作業が行われます。

祭りの様子



里芋の積み上げ



里芋の選別



蓬萊山を象つたとされる作り物には一山に九十個ものモナイモが用いられ、メシツギと呼ばれる容器に赤萩の茎を使って積み上げていきます。ふっくらと卵型の山になるように積み上げ、最後に花のついた梅の枝を二本差し、ひと山が仕上げられます。

仕上がった作り物は餅や鯛などとともに当番の家の床の間の十二所神社の掛軸の前に供えられ奉納を待ちます。

二十日には作り物の奉納などの祭典のほか、次の当番へと役を受け渡すトワタシという交代式が行われます。氏子総代の立ち会いのもと互いに盃を交わし、カラナマスというオカラを使ったナマスを食べる儀式が終了します。

二十一日には片付けなどが全て終わった後、女衆だけが集まってオコモリと呼ばれる会が開かれます。オコモリには村の家のほとんどが参加し、会の半ば頃になると、この土地に伝えられてきた「高砂」が手踊りを交えて披露され、三日間続いた祭りを締めくくります。



20日の奉納を待つ供物

千葉県館山市茂名

十二所神社

祭神 国常立命(くにことたちのみこと)

由緒

創建は養老二年(七一八年)で千年以上の歴史があります。はじめ葦加比神社と称されていま



里芋祭りが行われる十二所神社

したが、天正元年(一五七三年)には、村の戸数が十二戸であったことから「十二尊宮」とよぶようになったとされています。また里見家との関わりも深く、江戸幕府によって

検地が行われた際の記録には十二所神社が里見家の祈願所としても機能していたことが記されています。

一方、茂名では十二所神社を山の神だとする言い伝えもあるとされます。こうした信仰は、海をもたず、平坦な土地の少ない丘陵地帯にあって、畑作や山林と深く関わる暮らしの中から自然に育まれた信仰ともいえ

【里芋と儀礼】

近年まで日本の伝統的な生活文化は稲作のみを中心と考えられる傾向が強くなりましたが、茂名のように、稲作を基盤としながらも、畑作や漁撈、狩猟や採集など、さまざまな生産活動を組み合わせて暮らしを成り立たせていたことが伝統として集落に残っていることに改めて注目が集まっています。

里芋祭りの祭礼が行われる十二所神社には「氏神様には十二人の子供があつたが、妃の乳の出が悪く、甘酒と里芋でこれを育てた」という言い伝えがあります。そのなごりで、かつては祭礼には甘酒が振る舞われていました。また、茂名には「里芋を食べると風邪をひかない」といわれ、集落の生活と里芋が深く結びついていたことが伺えます。